

思想史の中で正しい位置付けをすることが、
 原資料を扱う者の使命であろう。本書は、金
 沢文庫に残された膨大な資料を、思想史に位
 置付ける作業の一環と捉えることができると思
 われる。従って、繰り返しになるが、本書
 紹介の資料や論説が今後更に検討を加えら
 れ、新しい成果を生み出してこそ、本書刊行

の意義も達せられるのではあるまいか。
 右は極めて拙なる紹介文であり、著者の意
 を十分汲み得たものではない。最後にその点
 を、著者並びに読者諸賢に陳謝する次第であ
 る。
 (法蔵館、昭和五十七年六月発行、A5版、
 本文六一二頁、索引八五頁、一四〇〇〇円)

古田紹欽・田中良昭著

『慧能』(人物 中国の仏教)

石川力山

能の生涯にすることが可能なのではなからう
 か。

中国禅宗に限らず、日本禅宗の研究を行う
 場合でも、中国禅宗六祖の慧能を無視し、あ
 るいは理解なくしてこれを進めることは、お
 そらく不可能であろう。中国禅宗初祖として
 の存在は達磨であることはいままでもない
 が、禅宗の思想を論ずる場合には、六祖慧能、
 あるいは『六祖壇経』の存在に必然的に突き
 当る。ある意味では禅思想のすべての淵源、
 禅僧の風格のあらゆるパターンの原型を、慧

ことほどさように、禅宗の中で六祖慧能の
 占める世界は巨大であるが、世の評価や位置
 付けの割に、その研究は進んでいない。それ
 はやはり、達磨像の世界と同様に六祖慧能の
 生涯についても、後世の伝説的附加部分が多
 く、祖師像の変遷が著るしかったことに起因
 しよう。それはとりもなおさず、祖師像とい
 うものが慧能を中核に展開したことを示すも
 のであるが、一方で、実像としての慧能像の

実態がうすれて、虚像としての慧能像だけが
 大きくふくれあがったことも事実であろう。
 近代になって、敦煌莫高窟より発見された
 多数の典籍の中に、すでに失われてしまっ
 たと思われた初期禅宗に関する貴重な文献が多
 数含まれていることがわかり、初期禅宗史の
 研究は飛躍的に進んだ。鈴木大拙、宇井伯寿、
 胡適等の諸博士の業績によるものであり、近
 年では関口真大博士、柳田聖山先生等の御研
 究が異彩を放っていることは周知のとおりで
 ある。

初期禅宗史研究がこのように進展する一方
 に於て、『六祖壇経』の研究等もやはり大き
 な進展を見せたが、六祖慧能の全体像に関す
 る研究は、さほど大きな成果を生まなかった。
 本書の著者の一人である田中良昭先生がリ
 ダーとなって研究を続けている、駒沢大学禅
 宗史研究会が先年まとめた『慧能研究』(昭
 和五十三年三月、大修館書店刊)は、そうし
 た中で、はじめて六祖慧能の全体にかかわる
 網羅的研究の先駆となった成果であったとい
 える。

しかし、この『慧能研究』も、その副題に
 「慧能の伝記と資料に関する基礎的研究」と
 ある如く、その内容は、『曹溪大師伝』の研

究を骨格とする慧能の伝記ならびに慧能伝の変遷の研究と、慧能の著作とされる『六祖壇經』及び『金剛經解義』の異本校定等を中心とする資料の提供に終止するものであり、ここに提供された慧能関係の膨大な資料をいかに利用し研究に生かすかが、今後に残された課題であった。

この度、「人物 中国の仏教」の一冊として刊行された『慧能』の著者古田紹欽先生は、禪宗、さらには広く仏教思想史の立場から、人間の叡智としての仏教を体究されており、また田中良昭先生は、右に紹介した『慧能研究』の刊行の責任者であり、中国禪の原点となった六祖慧能の伝記・著作・思想にわたる全体像を浮き彫りにして頂く企画としては、まことに時宜と人を得た刊行であったといえよう。

二

さて、本書は全体の構成は二部からなり、まず、古田紹欽先生の「中国禅宗史における南北の問題」と題する論考が掲げられ、示唆に富んだ初期禅宗の重要問題が究明されており、次に田中良昭先生により、「慧能の生涯と思想」と題し、伝記研究を中心とする慧能像

の変遷が鮮明に画き出されている。

はじめに、古田先生の「中国禅宗史における南北の問題」は、論題が示すように、中国禅宗五祖弘忍（六〇一〜六七四）の弟子達の中から南宗と北宗の二派に分派をみた、その南と北という地理的条件に着眼された、初期禅宗史の文化史的解明である。すなわち、禅宗は唐末から五代にかけて、五家七宗という分派をみるが、この場合の分派はあくまでも宗風上の性格による、極めて個人的、あるいは個性上の区別であったが、弘忍の会下における六祖曹溪慧能と神秀による南北二宗の分派は、中国という国土が、地理、風俗、言語、文化、物産、経済などの上において、必然的に南北に区別される文化史的理由があったとされるのである。そしてこの南北の相異は極めて対照的なものであったが、結局、南宗禅の祖慧能の禅が僧俗に解放的であったのに対し、北宗の祖神秀の禅は、いわばエリートのものである。慧能の禅には対抗すべくもなかったのである。さらに、中国のこの南北の差は、唐代になつて政治、経済、思想、文化の上に平均化を辿りつつあったが、宗密の立場、すなわち教禅の一致、頓漸の融合を主張する背景には、

慧能と神秀とを南頓北漸として分けてとらえる時代が終つたこと、換言すれば、中国禅宗がそこではじめて定着したということ論じている。

三

次に、田中良昭先生の分担の「慧能の生涯と思想」については、序、一慧能か恵能か、二生まれと育ち、三經典との出会い、四弘忍への参学、五碓坊生活と悟り、六印可を受けて九江へ、七慧明を化して南方へ、八印宗とのめぐりあい、九髪を剃って戒を受く、一〇曹溪での化導、一一朝廷との関わり合い、一二示寂の様子、一三滅後の出来事、結、に至る十五項目に分けてその生涯をたどっている。この六祖慧能の生涯を論述するにあたって用いた基礎資料は、次の十八種である。

- (一) 『光孝寺瘞髮塔記』
- (二) 『六祖能禪師碑銘并序』
- (三) 石井光雄氏旧蔵『荷沢神会禪師語録』末尾の『師資血脈伝』
- (四) 『歴代法宝記』
- (五) 『曹溪大師伝』
- (六) 『六祖壇經』（敦煌本）
- (七) 『曹溪第六祖賜諡大鑿禪師碑并序』

- (八) 『曹溪六祖大鑿禪師第二碑并序』
- (九) 『円覚経大疏釈義鈔』
- (十) 『祖堂集』
- (十一) 『宗鏡録』
- (十二) 『宋高僧伝』
- (十三) 『景德伝灯録』
- (十四) 『伝法正宗記』
- (十五) 『韶州曹溪山六祖師壇経』(大乘寺本)
- (十六) 興聖寺旧蔵『六祖壇経』(興聖寺本)
- (十七) 『六祖大師法宝壇経』(宗宝本)
- (十八) 『六祖大師縁起外紀』

これら十八種の基礎資料は、先の『慧能研究』における、慧能の伝記研究において基礎資料としたものをそのまま踏襲したもので、『曹溪大師伝』の具名は『唐韶州曹溪宝林山国寧寺六祖惠能大師伝法宗旨、并高宗大帝勅書、兼賜物改寺額、及大師印可門人、并滅度時六種瑞相、及智藥三藏懸記等伝』であり、敦煌本『六祖壇経』の具名は『南宗頓教最上大乘摩訶般若波羅蜜経、六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇経一卷、兼受無相戒弘法弟子法海集記』である。

『慧能研究』においては、慧能の伝記を『曹溪大師伝』の記載順にしたがって全体を五十

四項目に細分して論じられたが、本書においては、さらにこれを問題別に整理しなおして十五項目として論述されている。論述の進め方については、著者が自らあとがきで、

禅は特定の経論によらず(不立文字)、祖師の人格に直参して仏心の体得をめざす(以心伝心)という特色があり、したがって祖師像も、時代とともに理想化、象徴化がなされるのが常である。慧能についても決して例外ではない。否むしろ中国禅宗の大成者とされればされるほど、慧能像は大きく変遷していった、というのが実際である。そのために同じ慧能について記した資料の間には、驚くべき差異と矛盾が続出し、それらを統一的に取扱うことは、到底不可能である、というのが本稿を終ったの卒直な実感である。むしろそのような複雑な記事が遺されているという事実の中にこそ、真の慧能が存在しているといえないだろうか。と述べているように、慧能という祖師像が、時代により資料によってどのように受け取られ変遷していったかという、いわば、各項目毎の慧能の伝の変遷に主眼が置かれたもので、歴史的に実在した慧能という人間像その

ものを画くことは敢て避けているかに見える。哲学史を学ぶことがそのまま哲学であるといわれる如く、慧能という祖師像が歴史とともに、また時代とともに変遷する過程が、そのまま禅宗の歴史に外ならないことは確かであろう。その意味では本書表現は極めて読み易いものに整理されているが、内容はかなり高度な初期禅宗史研究の理解力が必要とされるものといえることができる。

四

次いで、「慧能の著作と解題」では、『六祖壇経』と『金剛経解義』の解題がなされており、『六祖壇経』については、数多くの異本があるうち、(一)敦煌本、(二)惠昕本、(三)興聖寺本、(四)大乘寺本、(五)契嵩本、(六)徳異本、(七)宗宝本の七種について、その成立や伝承経路が論じられ、「異本系統図」や「項門対照表」が付されている。

六祖慧能の著作とされる『金剛経解義』については、『六祖壇経』には多数の注釈書や研究書があるのに比較して、従来、偽撰としての扱いに終止し、六祖の著作としての意味が問われることは殆んどなかった文献であるが、関口真大博士が「慧能の般若波羅蜜」

『禪宗思想史』、昭和三十九年、山喜房仏書林）、「慧能研究に関するメモ」（『印度学佛教学研究』二〇巻二号、昭和四十七年）、「曹溪慧能の『金剛経解義』について」（『新羅仏教研究』、昭和四十八年、山喜房仏書林）などの一連の論考により、今後の研究の必要性を力説されたものであり、『慧能研究』においてはじめて本格的書誌的研究が行われ、鎌倉末期刊行の五山版を底本に、六地藏寺本、五家解本、川老註本、内閣文庫本、明曆本の合計六本対校の作業が行われたものである。本書にも、やはりこの六本についての書誌的概説が行われ、「異本系統図」や異本による内容比較表などが付されている。

五

最後に、「慧能の思想」として、興聖寺本『六祖壇経』を用いて、慧能の基本的思想と思われる、定と慧の問題、無念・無相・無住の教えの内容、坐禅に対する基本的立場、般若の行について、仏や浄土について等にわたって、概説を行っており、末尾には資料・文献一覧、慧能を中心とした禅宗系譜、禅宗地図等も付されている。

このように、本書の田中先生分担部分は、

『慧能』（石川）

およそ慧能に関するものはあらゆるものを具備させようとした、誠に内容豊富なものになっているが、伝記部分の叙述がその大半を占め、思想についての叙述が概説に終っている点は、今後の課題として残されよう。

ともかく、先の『慧能研究』によって慧能研究のための資料が殆んど整理され、この度は、古田紹欽先生と田中良昭先生の共著によって六祖慧能研究の入門書性格を持つ本書がまとめられた。今後の課題は、ここに提示された『金剛経解義』などをはじめとする新しい研究分野を積極的におし進めることにある。その意味において、本書は、初期禅宗史の入門書であると同時に、今後の研究課題を明示していただいたものとして、今後の研究の指針として、あえてここに内容の紹介をさせて頂いた次第である。

（大蔵出版、昭和五十七年一月発行、B6版、本文二五〇頁、図版二頁、あとがき二頁、二〇〇〇円）